

J. ヴァイスヴァイラーの Seele の 語源説をめぐって

藤井明彦

0. ヨーゼフ・ヴァイスヴァイラーが1940年に「インド・ゲルマン語研究」誌上に発表した論文《Seele und See. Ein etymologischer Versuch.》¹⁾は、その語源研究の歴史において画期的な意義をもつものであった。それ以前にも、この nhd. Seele (mhd. sēle, ahd. sēla, as. sēola, got. saiwala) と nhd. See (mhd. sē, ahd. sē(o), as. sēo, sēu, got. saiws) の近接関係には、ヤーコプ・グリムのほか二・三の研究者が注目していたが、音韻論的・形態論的および民俗学的見地からその連関を詳細に検討したのは、上掲のヴァイスヴァイラーの論文が最初である。

周知のように、nhd. See は男性名詞の場合は「湖」を、女性名詞の場合は「海」を意味するが、この文法的性による語内容の区別が行われるようになったのは、比較的遅く、16世紀になってからのことであり、それ以前はもっぱら男性名詞として用いられていたことが確められている²⁾。したがって、古ゲルマン諸方言における nhd. See の対応語たちが、どちらの意味をより古いものとして所有していたのかという問題が、論究の出発点となる。

この点ヴァイスヴァイラーは「湖」の本来性を主張する。その根拠としては、まず最古のゲルマン語記念物であるゴート語の saiws が、その6つの用例のすべてにおいて「湖」の意をもっていること、そしてゲルマン民族が互いに分離する——紀元前1世紀頃——以前の祖ゲルマン語からフィン・ウラル語族の

1) Josef Weisweiler: Seele und See. Ein etymologischer Versuch. In: Indogermanische Forschungen 57 (1940), S. 25-55.

2) Deutsches Wörterbuch. Bd. IX, Sp. 2808-2810.

ラップ語にもたらされたと推測される saiva (saivo) が、北ラップ人たちのあいだでは「真水湖」を、西および南ラップ人たちのもとでは「二重の湖底をもつ聖なる湖」を意味する事実が挙げられている。(→S. 31~32)

そして、この形態論的には a-語幹に所属する男性名詞 *saiwa-z „See“ に、後綴の l が付加されて、ō-語幹の女性名詞 *saiwa-lō „Seele“ が形成される。この l-後綴は縮小詞（たとえば nhd. -chen, -lein）の一種であるが、インド・ゲルマン諸語の縮小詞は元来「所属・由来」もあらわすと言われる。たとえば nhd. Tölpel, mhd. dörpel, törpel は「小さな村 (Dorf)」ではなく、「村出身の者、ぶこつ者」を意味する。したがって *saiwa-lō は、本来「湖に属するもの、湖からやってくるもの」という意味を所有していたのだという推測が成り立つわけである。(→S. 41~43)

では「湖に属するもの」とは何か？ それは「死者」と「胎児」であるとヴァイスヴァイラーは言う。そのことは、まず前述のラップ語の saiva (saivo) が、「二重の湖底をもつ聖なる湖」の意から、たとえば saiva-vare „Saiva-Berg“（聖なる湖の近くにある山）におけるように複合名詞の前半部として用いられることによって、しだいに「聖なる～」という意味に、そして更には生者たちに守護者として働きかけるところの、湖もしくは山に住む「祖霊」の意になったことによって支持されるという。そしてまた「胎児」については、このとりが誕生の瞬間を待つ胎児たちを沼地、池、湖等から運んでくるという民間伝承をその論拠として挙げている。すなわち、古代ゲルマン人たちはある特定の「聖なる湖」を、そこから胎児たちの魂が生まれて行き、そこへ死せる者たちの魂が帰って来るといふ《Heimat der Seelen》とみなしていたのではないかとヴァイスヴァイラーは結論づけている。(→S. 47~50)

本論考においては、ゴート語 (Got.), 古アイスランド語 (Aisl.), 古高ドイツ語 (Ahd.), 古ザクセン語 (As.) における „See“ の約 60 の用例と、l-後綴をめぐる諸状況、そして更には北欧神話に見られる古代ゲルマン人の靈魂観を洗い直すことによって、ヴァイスヴァイラーの所説を総括的に検討する。

1. まず古ゲルマン諸方言における „See“ の対応語たちの語内容の内訳は表1のとおりである。ゴート語は東ゲルマン語グループ、古アイスランド語は北ゲルマン語、古ザクセン語と古高ドイツ語は西ゲルマン語グループに所属する。年代的には、ゴート語が他の3つの方言よりも、500年近く先行している。紙幅の関係上、ここでは最古のゲルマン語記念物であるゴート語の例と、後で更に検討される古アイスランド語の用例のいくつかを紹介しておく。

表 1

	湖	海	計
Got. (ゴート語聖書等 ³⁾ , 4世紀)	6	0	6
Aisl. (古エッダ ⁴⁾ , 800年~1100年)	2	18	20
As. (ヘーリアント ⁵⁾ , 833年~850年)	15	7	22
Ahd. (オトフリートの福音書 ⁶⁾ , 870年頃)	6	8	14
計	29	33	62

Die Gotische Bibel, Lukas V. 1-2: jah is silba was standands neha saiwa Gainnesaraip, jah gasah twa skipa standandona at þamma saiwa, (そして彼—イエス—自身ゲネサレ湖の畔に立っておられた, そして湖の畔に二艘の舟があるのを目にとめられた)

この部分はいわゆるイエスの奇蹟のひとつで、「ゲネサレ湖の大漁」と呼ばれる話の一節である。ゲネサレ湖, 別名ガリラヤ湖はパレスチナの北部にある南北20km, 東西12kmの淡水湖で, この岸辺に住む人々の間でイエスは数多くの奇蹟を行なったわけである。

Die Urkunde zu Neapel, 1-4: andnemun skilliggans .rk. wairþ þize

3) Die Gotische Bibel, Hrsg. v. W. Streitberg. Heidelberg ⁶1971.

4) Edda. Die Lieder des Codex regius nebst verwandten Denkmählern. Hrsg. v. G. Neckel, 4. umgearbeitete Aufl. v. H. Kuhn. Heidelberg 1962.

5) Heliand und Genesis. Hrsg. v. O. Behagel, 8. Aufl. bearbeitet v. W. Mitzka. Tübingen 1965. (=ATB 4)

6) Otfrids Evangelienbuch, Hrsg. v. O. Erdmann, 6. Aufl. besorgt v. L. Wolff. Tübingen 1973. (=ATB 49)

saiwe. (我々は湖たち [=沼沢地] の値段 120 シリングを受け取った)

土地の譲渡に関する証文の一部であるが、引用した節は、全く同じ文句のまま 3 回繰り返されている。この計 6 例がゴート語における *saiws* の全用例であり、いずれもがヴァイスヴァイラーの指摘のとおり「海」ではなく「湖」を指している。

次に古アイスランド語の用例から、「湖」を意味する 2 例（他の 18 例は全て「海」）を引用しておく。

Edda, Vkv. Pr. 5-6: þar er vatn, er heitir Úlfsiár. (そこには狼湖と呼ばれる湖があった)

Edda, Vkv. 1: þær á sævar strönd settuz at hvílaz, (彼女たちは湖の畔に腰をおろして休んだ)

双方とも「ヴェルンドの歌」(序文と第 1 節)からの用例。南から来た乙女たちが、狼谷の狼湖と呼ばれる湖の畔にたどり着く場面である。この *sær* という語が、20 例中 18 例という圧倒的な割合において「海」の意を担っている事情に関しては、l-後綴の問題を検討した後に、詳しく掘り下げてみたい。

2. W. マイトはゲルマン語の l-後綴の役割を次の 5 つに分類している⁷⁾。対応語を補完して紹介する。

1) 形容詞をつくる: aisl. þegja (沈黙する) > þagall (寡黙な) 等。

2) 動作主名詞をつくる: ahd. biotan, nhd. bieten (法廷に来る義務のある人に裁判官の名で来いと命ずる) > butil, Büttel (それをする役人 = 裁判所の下級職員, 廷吏) 等。

3) 道具名: ahd. sliozan, nhd. schließen (閉める) > sluzzil, Schlüssel (鍵) 等。

4) 縮小詞をつくる: ahd. farh (ブタ) > ahd. farhili (子ブタ) > nhd. Ferkel (子ブタ) 等。

7) H. Krahe: Germanische Sprachwissenschaft. Bd. III Wortbildungslehre, v. W. Meid. Berlin 1967. (=Sammlung Göschen 1218/1218a/1218b) S. 85-88.

5) 所属名詞（～に属するもの）をつくる：ahd. eih, mhd. eich(e), nhd. Eiche (カシの木) > eihhila, eichel, Eichel (カシの実)；mhd. buoche, nhd. Buche (ブナの木) > büechel, [Bucheichel] (ブナの実)；ahd. grunt, mhd. grunt, nhd. Grund (底) > gruntila, grundel, Grundel (水底に住む魚, ハゼ)。マイトの触れているのは以上の3例のみ。ヴァイスヴァイラーは更に次の2例を挙げている (S. 42)：ahd. arm, mhd. arm, nhd. Arm (腕) > ermillo, ermel, Ärmel (袖, 腕に属し, 腕の形に似た衣服の一部)；mhd. dorf, nhd. Dorf (村) > törpel/dörpel, Tölpel (村出身の者, ぶこつ者)。

マイトは、この所属名詞を形成するという、1-後綴の5番目の働きを極めて稀としているが、Nhd. にまで伝えられている例がこれほど存在する以上、Seele の1-後綴の当該グループへの所属を否定する論拠は何もないはずである。

3. さて、3 ページの表1で注目されたのは、9割の用例が「海」を指している古アイスランド語 (古エッダ) の事情であった。4世紀から6世紀にかけての民族大移動期にキリスト教と接触し、そして早くからキリスト教化してしまった大陸ゲルマン族に較べて、874年から930年の間に、国内の政変が原因でノルウェーから移住して来た約5万人の人々の住んでいた孤島アイスランドにおいては、古代ゲルマン人の異教的思考様式・生活様式の原型が最もよく保存されていたはずであるが、その aisl. *sær* がなぜ圧倒的の用例を伴って「海」であるのだろうか。

これに関する最も素朴な推論は、アイスランドはまわりを「海」に囲まれた島であるからという考え方であろうが、これに対しては、アイスランドにもミュー湖、トリル湖をはじめとする5つの湖があるという最も素朴な反論のみならず、用例の出典である「古エッダ」において語られているのが、実際の地理的状况とは特別に結びついていない「神話詩」、「格言詩」、「英雄伝説」であるという事情が挙げられるであろう。唯一地理的状况と関連されうるのが英雄伝説であるが、これも大陸から直接、あるいはデンマークを経てスカンディナヴィアへ渡り、それがアイスランドまで伝来したものとされている。

この第1の素朴な推論はしかし、ゲルマン諸語において一義的に「湖」を表わす語を所有しているのは、lake をもつ英語と vatn をもつアイスランド語だけだという言語的事実に我々の注意を導く。すなわち、大ブリテン島、アイスランド島という島国に住む人々が、その居住地のすべてがそれによって取り囲まれているところの「海」に重大な関心を示し、その関心が「陸を取り巻く水」と「陸に取り巻かれた水」、すなわち海と湖の言語的区別へと向かって行くのも自然なことである。ここから得られる第2の推論は、古アイスランド語においては、専門的に「湖」を表わす vatn の存在によって、sær が「湖」から締め出され、多くの場合「海」を指すようになったのではないかとするものである。この vatn (>nhd. Wasser) は古エッダには計17回例証されており、表2のように真水の類を表わす例が15、海が2である。なおヴァイスヴァイラー

表2 aisl. vatn 川の水 浄めの水 湖 飲み水 雨	} 15 : 2 海	ーによればアイスランドへの入植前後の事情を誌した長編サガ Landnámabók (植民の書) においては、湖の名前を表わす合成語の後半部、すなわち「～湖」の部分は、全17例のすべてが „...vatn“ であり、 „...sjór (sær)“ というタイプの合成語はひとつも例証されていない (→S. 29)。しかしこの第2の推論も、古アイスランド語には、同様にもっぱら「海」をさす語 marr (>nhd. Meer) が存在するという言語事情によって否定されざるを得ない。marr はその6つの用例のすべてにおいて一義的に「海」を指している ⁸⁾ 。
---	------------	--

しかしまた、この vatn—sær, sær—marr という類義語の同居は、第3の推論への手がかりを与えてくれる。即ち古ゲルマン諸語の韻文作品の多くは、古高ドイツ語で書かれたオトフリースの「福音書」が登場するまでは脚韻ではなく頭韻を踏んでおり、古エッダもその例外ではない。4ページの Vkv. 1 を例にとれば、前半部の sævar と後半部の settuz が S 頭韻を形成している。このような頭韻規則は古エッダにおいてはほぼ完全に保持されている重要な形式規則であり、実際の詩作において、近親的な意味合いをもつ複数の語のうちか

8) →Vsp. 57, Háv. 62, Vm. 48, Hym. 24, Alv. 23, 24.

らひとつを選択する場合、この規則が基準として重要な役割を果すことは大いにありうる。即ち同行内で他の語同士による頭韻が形成できず、たとえば「海」を表わす語を頭韻に参加させなくてはならない場合、一義的に「海」を指す語、即ち *marr* をさしおいて、「海」も表わす語 *sær* を S 頭韻のために採用することも十分に考えられる。従って頭韻に参加している場合の *sær* は、一義的に「海」を示す語ではない可能性が開けてくる。「海」の *sær* 全 18 用例のうち、S 頭韻形成に参加しているのは 15 例、Vsp. 20 と Háv. 82 のみが頭韻無関与、あとの 1 例は散文中のもの (Vkv. Pr. 6) である。従って *sær* は 15/18、即ち最大 83% の割合で一義的に「海」を指す語ではない可能性が想定されうる。古エッダで一般的に頻度の高い頭韻は S 頭韻、H 頭韻、それに母音同士の頭韻である。たとえば「ところ」を表わす 3 つの名詞 *ged*, *hugr*, *sefi* のうち *sefi* はその全 6 例において S 頭韻に参加しており、この語はそれ自体 *ged* や *hugr* と意味上特に異なった内容をもつ語ではなく、S 頭韻のために利用される (特に *hugr* の) 代替語ではないかと推測される⁹⁾。また「賢い」の意をもつ 8 つの形容詞 *fródr*, *horscr*, *kunnigr*, *snotr*, *spakr*, *svidr*, *viss*, *vittr* のうち、25 の用例のすべてが H 頭韻形成に参加している *horscr* は、意味内容的に無色な「賢い」の領域語で、H 頭韻専用の完全な「詩語」と見なされうる¹⁰⁾。しかしこのように全用例が頭韻関与し、語内容も「稀薄」な *sefi* や *horscr* とは *sær* は明らかに一線を画している。頭韻形成のための語が Nhd. まで命脈を保ち続けることは極めて考えにくい。従って 18 例 - 15 例 = 3 例 (海) : 2 (湖) といった計算上の比率も、*sær* の「湖」性に関していささかの論拠づけも行ないえないものである。

以上、古エッダの *sær* においてはなぜ「海」が「湖」に大きくまさっているかに関して 3 つの解決案を検討したわけであるが、何れも十分なものとはいえない。

9) 拙論：「古エッダ」における「ところ」の領域語に関する考察，Angelus Novus 第 4 号（東京 1976 年），1 頁～29 頁，特に 13 頁。

10) 拙論：古アイスランド語の「賢い」の領域語，早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第 5 集（1979 年），19 頁～34 頁，特に 31 頁。

4. この古エッダにおけるデータを十分に解決することができない原因は、むしろヴァイスヴァイラーの説、即ち古ゲルマン諸方言における See の対応語たちは「海」よりも「湖」の意を本来的なものとして持っていたという説に、古アイスランド語の言語状態を恣意的に引き寄せようとしていたことにあるのではないだろうか。即ち *sær* の 20 用例のうち 18 例が「海」であるという事情をそのまま眺めれば、*sær* は「湖」をさすこともあるが、その殆どの場合において「海」であったのだとする方が、むしろ妥当な考えであろう。この点に関して興味深いのは、古エッダの次の部分である。

Vsp. 17: Unz þrír qvómo ór því líði, / oþlgir oc ástgir, at húsi ; / fundo á landi, lítt megandi, / Asc oc Emblo, órløglausa. (そしてこの群れから、力強くやさしい 3 人の神々が家へやって来た。彼らは浜辺で非力な、いまだ運命を定められていないアスクとエムブラをみつけた。)

これは「巫女の予言 *Vǫlospá*」という、古エッダ巻頭の神話詩の第 17 節全体の引用であるが、次の 18 節では、これら 3 人の神々——オーディン、ヘーニル、ローズル——による人間創造の物語が語られている。即ちゲルマン神話における人間創造は「海辺」で行なわれたわけである。

また同じく古エッダ中の「シンフィアトリの死について *Frá dauða Sinfjötla*」には、次のような記述がある：「シグムンドは死んだ息子をかかえて、しばらく運び、狭く長いフィヨルドへとやって来た。そこには一艘の小さな舟があり、その中にはひとりの男がいた。その男はシグムンドに、フィヨルドに舟を出そうと申し出た。そしてシグムンドが死体を舟の上に運ぶと、小舟は彼らに乗せた。男はシグムンドに、フィヨルドの奥へお行きなさいと言った。男は舟を押し出して、すぐに姿を消した。」¹¹⁾

そしてまた、北欧神話のもう一方の重要な原典資料であるスノリ・ストゥルルソンの「エッダ」¹²⁾の第 49 章には、次のような記述がある：「アース神たちはバルドルの死体をかついで、海辺へやって来た。フリングホルニと、バルドル

11) G. Neckel/H. Kuhn: Edda. S. 162, Z. 20-25.

12) „Snorri Sturlusson—Edda.“ Udgiven af F. Jónsson, København 1900, S. 123.

の舟は呼ばれていた。それはすべての舟のうちで最も大きなものであった。それを神々は海に浮かべて、そしてバルドルの葬儀をしようとしたのだ。」

これらの記述は、いわゆる舟葬、死者を舟に乗せて海へ送り出すという風習を物語るものである。古エッダにおいては一方、ヴァイスヴァイラーが指摘しているような「湖」に属するものとしての胎児そして死者という表象は見当らない。むしろ、引用した3つの記述からは、生まれ来る者たちがそこからやって来て、死せる者たちがまたそこへ戻って行く場所は、ゲルマン神話の最も重要な原典資料である古エッダにおいては、むしろ「海」であると考えられていたのではないかという推測も十分に成立しうる。

ヴァイスヴァイラー説の今ひとつの弱点は、当の古アイスランド語において、祖ゲルマン語の **saiwa-lō* (>nhd. *Seele*) の直系の子孫と見なされうる語が存在していないことである。Aisl. *sál(a)* は、祖ゲルマン語から直接受け継いだ語ではなく、古英語もしくは古ザクセン語からの借用語であること、即ちイギリス人ドイツ人の伝道師たちがアイスランドへ持ち込んだ語であることが知られている¹³⁾。従ってこの語は異教的文献には一度も登場していない。この間の事情についてヴァイスヴァイラーは、「かつては祖ゲルマン語直系の語が存在していたのだろうが、それがおそらく何らかの事情で消滅してしまったのではないか」とだけ述べている。(→S. 50)

5. ヴァイスヴァイラーの、*Seele* を「湖に属するもの」とする語源説は——発表された1940年という時代状況はさておき——それまで殆ど臆測でしか有り得なかったこの語に関する語源研究に、初めて言語史的に詳細で、かつ文化史的に興味深い議論を持ち込んだという点で、大いに評価されてしかるべきである。そして、ゴート語の *saiws* とラップ語の *saiva* (*saivo*) に基づく「湖」の本来性の主張と、l-後綴に関する議論は確かに正当なものとして支持されるが、古代ゲルマン人の心性、風習を最も原型に近く留めているはずの古アイスランド語において、上述のようないくつかの問題点をかかえていることは否

13) F. Fischer : Die Lehnwörter des Altwestnordischen. Berlin 1909, S. 25.

めない。それらの矛盾を改めて指摘し、その間の懸隔を埋めて行くことが、今後の課題であろう。